



Title	ヨーロッパの「老い」 : スーパーマーケットの虫眠鏡 : フランス編
Author(s)	堀井, 富士子
Citation	大阪公衆衛生. 1987, 52, p. 12-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83743
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヨーロッパの「老い」

— スーパーマーケットの虫眼鏡 —

～フランス編～

大阪府寝屋川保健所長 堀井富士子

ジュネーブから新幹線TGV 920にのって、自由と芸術の国フランスのリヨン駅についた。

フランスは高齢化社会突入が1865年であるから、すでに130年という長い年月を経てきている。

65歳以上人口割合は1980年で13.7%、2000年14.6%、2025年18.6%という国連推計である。

高齢者対策、医療費の高騰対策のため、1980年に国レベルで保健局と病院局を統合して一つにまとめ、治療だけでなく、予防活動とリハビリテーション部門を重視していこうという基本方針をうちだした。

地方・県レベルでは、すでに1964年保健と福祉の一元化の必要を感じ、保健社会活動部を発足させている。そんな努力をこころみてきたが、やはり社会保障費が国家レベルでひばくし最も真剣に取りくまねばならない課題である等、長い歴史的時間をもつ老人国でも同じように悩んでいた。

飲酒運転と革命

パリの町はヴァカンスに入り民族北部大移動の時にぶつかり、北行きハイウェイは完全な交通渋滞であった

サラリーマンは年休5週間、子どもの学校の夏休みにまとめて休暇をとって、家族づれでヴァカンスに出かける。フランスの男はそのため働き、総人口の50%は2～3週間の計画をたて、女・子どもにサービスをする。

ひさかたぶりに子ども、子どもとこの国では、子どもの話がでてくる。130年経過した老人国のフランスが、今次第に若返りつつあるのかもしれない。国連推計をみると、0～14歳の割合が1980年で22.2%と今の日本に近い数を見せしており、2000年、2025年と日本、ヨーロッパ各国のいずれよりも年少人口割合の高い国になる。子どもの話が多く出るのもそのためかも……。公園では老人と子どもが遊んでいる。

深刻なアルコール問題

モンマルトルの丘でも子どもの話、もっともそれは子どものアリ中の話（フランスでは子どものアル中が多い）。モンマルトルの丘で毎日飲んでいたユトリロ。彼は16歳の母から生まれ、祖母にあずけられた。祖母は水より安いからワインを毎日飲ませて育てた。だからアル中になった——。アル中、麻薬中毒、小児虐待、登校拒否、自閉症等々が今パリの子どもをめぐる大きな健康問題だそうである。

フランスのアル中問題は深刻で、大統領の諮問機関としての対策委員会がある。もともとフランスのドライバーは飲酒運転OKであり、検問でしらべがないので事故がおこらない限り、どれほどのんでいるかわからない。（一応血中濃度0.8mgまでとされている）。

委員会はこれを禁止にもっていきたいのであるが、うるさくするとワイン会社が動きだし、デモがおこり大革命にまでなるかも——

とびびっているような。7月14日革命記念日。マリー・アントワネットがギロチンで処刑されたコンコルド広場はパレードの用意のため、さながら工事現場のようで世界一美しい広場の定評はおもかげもなかった。

親 と 子

フランスの社会保障施策上設定された、国立ネッケル小児病院を公式訪問した。

1778年ネッケル大臣夫人が孤児救済のため、30床の孤児院をたてたのがはじまりである。

(200年たった今もこの建物は使用されている。)現在3つの病院が集合して、成人1,150床、小児用400床の計1,550床となっている。

小児精神科医のMr.シュミットは「1970年頃は大病院が流行したが、今は600床位の中規模病院がよいとされている。その方が患者の人間性が尊重されるし、特に小児病院は完全看護になってから母子分離の悪い傾向がみえてきて困っている。現在患者の母をボランティアとして病院の手伝いをさせ、児へのかわりを持たせるような方法を考えている。

なんとかして母と子の愛情の希薄化をくいとめねばと努力している。子どもの病気は家族ぐるみの対応で治療しなければならないし、我々は将来の親子の人間関係に、スキを作るようなことをしてはいけない。老後の人生のために親にそれを教えている。」と言っておられた。

すばらしい小児科医だと心をうたれた。

核家族の少ないフランス

医療費については30%自己負担、その分を民間の自由保険に入っていればそれでおぎなえたが、近年医療費の高騰で民間保険会社がダウンし、2年前から1日当り20FrS(約600円)の自己負担が必要になったとか。外国人は全額自費なので大変だ。

平均入院日数8.5日、家庭医からの依頼で入院するが、老人や慢性疾患患者にベッドを

占有されることもなく、退院後再び家庭医にバトンタッチされていく。

幸せなことにフランスはヨーロッパで一番核家族の少ない国、すなわち親子がいつまでも一緒にくらす傾向があり、多くの老人は家族と共に楽しくくらししている。別々に離れていても親子の交流がひんぱんにもたれ、楽しく交流しあっている姿をよくみるそうだ。

フランス映画のラストで涙をポロポロなんというのは、楽しい人生だからこそ自分の幸せの再確認がえられる悲恋ものが受けるのかもしれない。

アシスタント・ソーシャル

フランスの老齢年金は、60歳以上になると最低でも、10年間の月平均賃金の50%が毎月もらえるそうだ。

在宅老人ケアは民間組織で運営され、そこに所属する訪問看護婦、ホームヘルパーは家庭医からの連絡と指示で活動している。

保健婦に相当する職種は、アシスタント・ソーシャルAssistante de service social (AS)と呼ばれ、公衆衛生と福祉を一本化して家庭訪問活動をしている。ASになるための学校は入学の条件として看護婦の免許を必要とはしていない。

市町村に働くASは一般的多面的AS、県レベルのASは特殊問題別専門ASと分化している。

日本で今検討されている府県保健婦と市町村保健婦問題は、このあたりをよく聞かせてもらおうと参考になりそうな気がする。

